

絵本『レオンとイエレーナ』にみる保育施設における 子どもたちの参画

Partizipation der Kinder in Kindertageseinrichtungen im
Bilderbuch „Leon und Jelena“

船 越 美 穂

Miho FUNAKOSHI

学校教育ユニット

(令和3年9月28日受付, 令和3年12月23日受理)

はじめに

シュレーズヴィヒ＝ホルシュタイン州のモデルプロジェクト「保育施設における民主主義への教育」(Kinderstube der Demokratie: 2001-2003)以来, ドイツ全土において子どもたちの参画のために尽力してきた参画と教育研究所 (Institut für Partizipation und Bildung) のクナウアーとハンゼンは, 保育現場に分かりやすいように, 参画の実践を可視化することに努力している¹。その中に, 子どもたちを読者対象とする絵本シリーズ『レオンとイエレーナ』がある。

2021年5月にクナウアーとハンゼンはシリーズ13冊目となる絵本を出版した。コロナ禍2度目の春に, 新しい絵本を出版した背景には, 20年にわたって参画の理論と実践の構築, 及び保育者研修に力を注いで来たクナウアーとハンゼンの思いが秘められていると推察される。絵本の内容とともに, 作者たちの思いを知ることが, コロナ禍の中, 子どもたちの参加する権利が後回しになりがちな現代において意味があると考えられる。さらに, 筆者は日本の保育者や養成校の学生たちにかねがねドイツの保育施設における子どもたちの参画の実践例を伝える必要性を感じてきた。筆者が2016年9月19日に参与観察したドイツのリューネブルク市の保育施設における保育者研修の中で, 講師は絵本『レオンとイエレーナ』シリーズの中から何冊かを紹介していた²。絵本『レオンとイエレーナ』は子どもだけでなく, 保育者に

とっても保育施設における参画を理解する上で意味を持っていることが推察される。

本論文ではシリーズ13冊目の絵本『レオンとイエレーナ おおきなえんそく』(Leon und Jelena Der große Ausflug)³の分析を通して, ドイツの保育施設における子どもたちの参画の実践を明らかにする。さらに, 作者のクナウアーへの質問調査によって, 絵本出版の経緯や思いを知ることによって, 現代のコロナ禍の中での保育の課題と展望をも問い直したい。

1. 絵本『レオンとイエレーナ』の誕生

筆者は2021年8月31日に12項目からなる質問用紙を電子メールによって作者の一人であるクナウアーに送付した。クナウアーは詳細な回答を9月8日に返信した。以下, クナウアーからの回答に基づいて絵本『レオンとイエレーナ』シリーズ刊行の内実を明らかにする。

(1) 絵本『レオンとイエレーナ』刊行の経緯と動機

「私たちが20年前に開発した『保育施設における民主主義への教育』(Die Kinderstube der Demokratie)を実践している幼稚園の保育者たちは, 私たち(ハンゼンと私)にもうずっと前から, 子どもたちを参画させるときに彼らが体験することについて繰り返し感激しながら物語っています。私たちには子どもたちと大人のためにこの

ような話を記録するアイデアがすでに早い時期からありました。それがついにドイツのベルテルスマン財団によるプロジェクト『保育施設における共同決定と共同行動』(Mitentscheiden und Mithandeln in der Kita) の中で実現したのです。目標は、まず第一に、子どもたちに民主主義的な参画というテーマに具体的に親しませることでした。私たちは保育施設の子どもたちに、共同決定と共同行動をしても良いこと、そしてそれはどのように行われるのか示したかったのです。」

クナウアーとハンゼンは2001年にシュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州においてモデルプロジェクト「保育施設における民主主義への教育」(2001-2003)を立ち上げて以来、ドイツ全土で保育者研修、及び普及者(Multiplikatorinnen und Multiplikatoren)の養成を行っている。2017年のインタビューの中で、クナウアーとハンゼンは共通して、モデルプロジェクトは「机上で生まれた考えではなく、行動の中で生まれた、そして繰り返し省察して、実践によって発展させる」コンセプトであると語った⁴。従って、クナウアーとハンゼンは、保育現場に分かりやすいように、参画の実践を書籍、DVD映像、絵カードなどによって可視化することに努めてきた。絵本『レオンとイエレーナ』もまさにその一環として誕生したのである。絵本『レオンとイエレーナ』を出版年ごとに以下に示す。

2014 年

- ・『あたらしいクライミングタワー』(Der neue Kletterturm)
- ・『子どもぎかいの イエレーナ』(Jelena im Kinderparlament)
- ・『さんりんしゃの ていりゅうじょ』(Die Haltestelle für Dreiräder)
- ・『こうえんの いぬのうんち』(Die Hundehaufen im Park)
- ・『ちょうしょくの ざせき』(Ein Platz zum Frühstück)

2015 年

- ・『とだなとびあそび』(Das Schrankspringer - Spiel)
- ・『どろんこようずボンを かくさないと』(Die Matschhose muss weg)
- ・『くつのためのくつ』(Schuhe für die Schuhe)

2018 年

- ・『あたらしいほいくしゃ』(Die neue Erzieherin)
- ・『さかなのなまえ』(Ein Name für den Fisch)

- ・『ほいくえんじのための こうじげんば』(Eine Baustelle für die Krippis)
- ・『がっこうのこどもかいぎ』(Eine Kinderkonferenz für die Schule)

2021 年

- ・『おおきな えんそく』(Der große Ausflug)

(2) 絵本出版の具体的プロセス

「絵本は保育施設の実際の話に基づいています。例えば絵本『あたらしいクライミングタワー』の中に描かれている用務員の男性とは、私は会議で実際に知り合いました。絵本『さんりんしゃの ていりゅうじょ』の停留所の標識板については写真を持っています。すべての他の絵本も実際に起こったことが核心となっています。色々な保育施設のこれらのエピソードから私たちは絵本を開発しているのです。」

絵本の物語はまさに保育実践の中から誕生している。続いて、絵本出版のプロセスについて次のように述べている。

「私たちが、物語の内容的な重点事項を資金援助してくれているベルテルスマン財団と申し合わせたら、私たちが作成したテキストがズィモーネ・ネッティングスマイヤーによって審査されます。そのあとで、マティアス・ベルクハーンが物語に挿絵をつけます。このプロセスの間中、私たちは物語、テキスト、挿絵が互いに調和するように、繰り返し意見交換をします。私たちが新しい絵本の最初の部を手にするとき、全員が嬉しくて、試行的に読んでもらう幼い読者の反応に好奇心を燃やします。」

絵本づくりの最終段階で保育施設の子どもたちに読んで聞かせ、フィードバックするところに、実践から出発し、実践に回帰するという作者たちのポリシーが現れている。

(3) 挿絵画家との連携

絵本の中で、挿絵画家は実に正確に、緻密にドイツの幼稚園を描いている。どのように挿絵画家と連携をしているのか尋ねた。

「最初の頃の物語を作る時に、私たちはさらに密接に調整を図りました。そうこうするうちに、ベルクハーン氏はレオンとイエレーナの幼稚園と子どもたちのグループのことをとてもよく分かるようになったのです。物語に挿絵をつけることを彼はとても楽しんでます。彼は一人一人の子どもたちに独自の表情を与えることを成し遂げています。私たちにとって何が大切なのか知ってもら

うために、テキストと共に、写真やスケッチ（例えば、子ども会議の議事録）も送ります。彼から最初の白黒のスケッチを受け取ると、さらに変更の提案や要望を述べることができます。その後ようやく挿絵に色がつけられます。」

挿絵画家も13冊の絵本作りの中で、保育施設における子どもたちの参画のことを理解し、青グループの子どもたち一人一人の個性を表現できるようになった。そして何よりも画家自身もこの仕事を楽しんでいることが特徴であろう。

(4) 保育施設でどのように受け止められているか

「多くの子どもたちから、私たちの絵本を好きだと聞いています。そして、絵本は子どもたちにとってだけでなく、大人にとっても興味深いものであることにすぐに気づきました。レオンとイエレーナの物語では、保育施設の参画が具体的に示されています。だから親や保育者自身も、絵本を使って、抽象的な言葉である参画（Partizipation）が意味することをより容易に想像することができました。」

「保育者は保育施設で子どもたちと特定のテーマについて話し合うために絵本を使っています。例えば子どもたちと規則について話したい時には、絵本『くつのためのくつ』によって規則は全員に適用されることを明らかにすることができます。そして絵本が存在することによってだけで、頻繁にその都度の参画のテーマが話題にされるようになります。つまり、子どもの間で、子どもと大人の間で、大人の間で。」

絵本『レオンとイエレーナ』は、その内容が実際の保育実践をベースとしている。また詳細なところまで正確に描かれたイラストから実際の幼稚園の様子がリアルにイメージすることができるのも特徴である。そのため子どもや保育者にとって分かりやすく、直接実践に結びつく敷居の低さがあると考えられる。この点こそが保育者研修の中で、実践事例として絵本が使用される所以である。

次に絵本『レオンとイエレーナ おおきなえんそく』の内容を紹介する。

2. 絵本『レオンとイエレーナ おおきなえんそく』

絵本『おおきなえんそく』（Der große Ausflug）は既に述べた通り、シリーズ13冊目の絵本である。今回、本論文の中で絵本の内容とイラストをすべて使用することを、作者と出版社から許可をいただいた。ここでは絵本の内容を筆者の日本語

訳で紹介する。

(1) 表紙



(2)



「バイバイ、ママ！」イエレーナはさげんで、ようちえんへ走っていきます。イエレーナは、ちこくしています！ろうかを走っていると、えんちょうのシュナイダーさんに会いました。

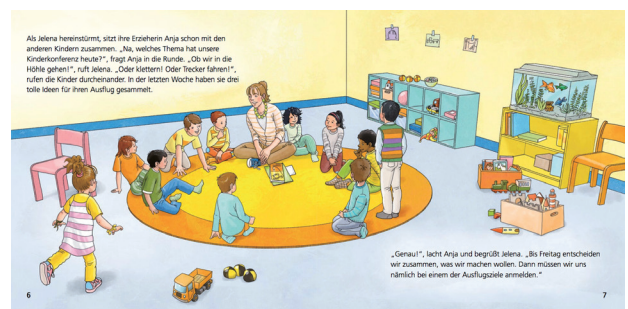
「まあ、おはよう、イエレーナ」とシュナイダーさんは、あいさつをしました。

「あなたの青グループでは、こどもかいぎがもうはじまってるわよ！」

「わかってるわ、だからぜんそくりよくでそこへいくわ！」とイエレーナは、いきをきらしています。

「わたしたちは、おおきなえんそくでどこへいくか、はなしあうことになってるの！」

(3)



イエレーナがかけこんできたら、ほいくしゃのアンヤは、

こどもたちといっしょにすでにすわっていました。「さて、きょうのわたしたちの こどもかいぎのテーマは 为什么呢？」とアンヤは、みんなに しつもんしました。「どうくつへ いくかどうか！」とイエレーナがさげました。「よじのぼること！ トラクターにのるの！」と、こどもたちは めいめい かってに さげました。せんしゅう、こどもたちは、えんそくのために、3つのすばらしいアイデアを あつめていました。

「そのとおり！」とアンヤはわらって、イエレーナをむかえました。「きんようびまでに、なにをしたいのか いっしょにきめましょう。それから えんそくの いきさきの 1つに もうしこまないといけません」

(4)



「わたしは、どうくつにさんせい！」とイーリアスがすぐにさげました。「いいや、トラクターにのるほうがいい」とゼムラはおもっています。「とうひょうするまえに、ぜんいんで 3つのアイデアについて もっとよく かんがえないといけないわ」とアンヤは、いぎをとえました。「そのために、あなたたちに どうくつ、トラクターツアー、クライミングパークのパンフレットを もってきました」

アンヤは、3まいのチラシを かべにはりました。そこには えんそくのいきさきの おおくのしゃしんを みることができます。こどもたちは、すべてをよくかんさつしました。

(5)



「みてごらん! こどもたちが どうくつで かいちゅうで んとうつきのヘルメットを かぶってる」とイーリアスが かんげきしてさげました。「これはなに？」とイエレーナは、しゃしんを さしてたずねました。「それは、どうくつで ねむっている コウモリよ」とアンヤはせつめいしました。ゼムラは、トラクターツアーのチラシを かんさつしています。「ここでは こどもたちは ただトレラーにすわっているだけだ」とがっかりして いいました。「わたしはトラクターを うんてんしたかったのに！」—「ただ いっしょに のっていただけじゃ たいくつ」とイーリアスもおもいました。

マックスは、クライミングパークのしゃしんに かんどうしました。「ロープが たかいところに かかっている」とおどろいています。「したのほうにも なにかがあるよ」とバドゥーがいいます。「たかいところへは、いずれにせよ、ねんちょうのこどもと おとなだけが のぼってもいいんだって！」—「ほんとう？」とイエレーナが といかえしました。というのは、かのじょのともだちのレオンは いちばんたかいところまでの のぼりたかったのです。

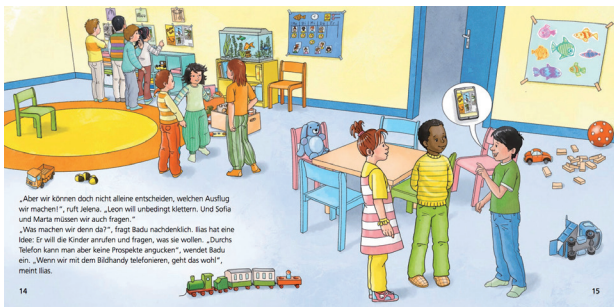
(6)



「レオンはどこにいるの？」とイエレーナはたずねました。「それからソフィーアとマルタは？」—「3にんともびょうきだと アマリールがいったよ」とイーリアスはこたえました。「レオンはかおじゅうに、あかいてんてんがあるんだって、あとのふたりにも」

ゼムラは よくしっていました。「それは、ほうそうのみず⁵」と かのじょは、せつめいしました。「わたしも かかったことがあるよ。それで たくさんのぶつぶつができて、すごく かゆいんだ。でも かきむしったらだめ」—「そのとおり、みずぼうそうは ふかいで、うつりやすいのよ」とアンヤがこたえました。「レオン、ソフィーア、マルタは、えんそくまでには きっとまたげんきになるわ」

(7)



「それにしても、どこに えんそくへいくかを じぶんたちだけでは きめられないよ!」とイエレーナがさげびました。「レオンは ぜったいに よじのぼりたがってる。ソフィアとマルタにも たずねないといけない」
 「それじゃ どうしようか?」とバドゥーがかんがえこみながら ききました。イーリアスには かんがえがあります。それは かれが こどもたちに でんわをして、どうしたいか たずねることです。「でも、でんわでは パンフレットを かんさつできないよ」とバドゥーが はんろんしました。「けいたいで ビデオでんわしたら、きつとうまいくよ」とイーリアスはいいました。

(8)



「それを わたしたちは、ざんねんながら してはいけないわ」とアンヤは いいました。「いったい どうしてだめなの?」とイーリアスは、といかえしました。「もしかしたら、レオン、ソフィア、マルタは、わたしたちから、けいたいで ビデオでんわが かかることを のぞまないかもしれない」とアンヤは いいました。「もしかしたら、それを かれらのおやも のぞまないでしょう。ようするに あなたたちは ぜんいんで、3 にんが ベッドによこたわっているのを みることになるのよ」

こどもたちは、かんがえこみました。「でも、パンフレットのしゃしんをとることができるわ」とイエレーナが ていあんしました。「それを コンピューターで こどもたちに そうしんして、それから でんわをかけて、なにをしたいのか はなしをする」みんな、それを よいアイデアだ とおもいました。

(9)



バドゥーは、パンフレットを カメラで さつえいしました。そのあと、こどもたちは、シュナイダーさんのへやへ いきました。「レオン、ソフィア、マルタに しゃしんを おくってくださいか? かれらは びょうきなんです」と こどもたちは、シュナイダーさんに せまりました。こどもたちは、びょうきのこどもも、おおきなえんそくで どこへいくか、とうひょうしてほしいと せつめいしました。

「わたしから、おやに メールをおくれるわ」とシュナイダーさんは いいました。そして かのじょは 2つのさしこみぐちのついた ケーブルを とりだしました。いっぽうのはしは カメラに、もういっぽうは コンピューターに さしこみました。そのあと すぐに バドゥーのしゃしんを、がめんで みることができました。「これらのしゃしんを そうしんするときに、わたしたちは、あした でんわするね! と かきそえてね」とイエレーナは いいました。「わかった!」とシュナイダーさんは いいました。

(10)



つぎのひ、青グループでは、イエレーナとイーリアスが、びょうきのこどもたちと はなすことを、けつぎしました。アンヤはぜんいんが かいわを いっしょにきけるように でんわを ちょうせつしました。マルタは たとえうままでいくことが きんしでも、よじのぼりたがっています。しかし かのじょは、どうくつのことも きにいつています。レオンは、かれらには ひくいロープをつかうことだけが みとめられていると イエレーナがせつめいするまでは、ぜったいに よじのぼるつもりでした。しかし

いまは、どうくつのほうを きにっています。

イーリアスが ソフィーアに でんわをかけようとしているとき、シュナイダーさんが はいってきました。「ソフィーアは しゃしんを みれなかったそうよ。かのじよのママのコンピューターが こわれているのですって」とシュナイダーさんは いいました。「それじゃ、わたしたちが、パンフレットを いえまで とどけにいきましょう」とイエレーナが ていあんしました。アンヤは ごういしました。ソフィーアは ようちえんのすぐとなりに 住んでいるのです。

(11)



いそいで 青グループは、パンフレットをもって しゅっぱつしました。こどもたちが ソフィーアのいえについたとき、かのじよは ちょうど まどべにいました。「やあ、ソフィーア、わたしたちは あなたが どこへえんそくに いきたいか ききたいのよ」とイエレーナがさげびました。「パンフレットを よく みてごらんさい」とアンヤがいて、まどガラスにかざしました。「わたしは トラクターにのりたいわ」とソフィーアは さげびました。「そこでは ぼくたちは トレーラーに すわっているだけなんだよ!」とゼムラはおしえました。「ふーん、それは つまらない!」とソフィーアは いいました。「でも よじの ぼるの は こわいわ。どうくつは くらくて、よく みえないし」—「かいちゅうでんとうつきのヘルメットがあるよ」とイーリアスがさげびました。ソフィーアは どうくつのチラシを もういちど よくみました。「あらまあ、コウモリ!」とかのじよは さげびました。「それを わたし みたい」

(12)



こどもたちが ようちえんへ もどったら、おおきなえんそくで、どこへいくか とうひょうします。そのために かれらは トラクター、どうくつ、クライミングパークの えきごうのしたに、ひとつずつ かごをおきました。どの こどもも じぶんのすきな いきさきのかごに ガラスだまを ひとついれました。さいごに アマリールが レオン、ソフィーア、マルタのために ガラスだまを かごにいれました。

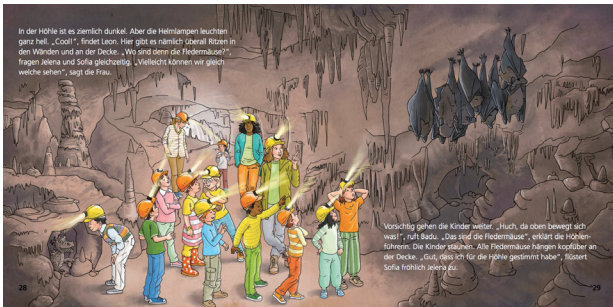
それから しゅうけいされました。トラクターツアーのかごには ガラスだまは はいっていません。クライミングパークは 2このガラスだまを かくとくしました。どうくつには とてもおおくの ガラスだまがありました。「わあい、どうくつに いけるわ!」とイーリアスが かんせいを あげました。

(13)



レオン、ソフィーア、マルタは とつくに けんこうになって、きょうは えんそくのひです。1 だいのバスが 青グループを どうくつに つれてきました。そこには すでに しんせつな おんなのひとが たっていて、こどもたちを かんげいしました。「やあ!」とかのじよは いいました。「わたしは あなたたちの どうくつあんないにんです。これから あなたたちといっしょに はっけんのたびを はじめます!」それから ぜんいんは、かいちゅうでんとうつきのヘルメットを うけとると、さあ はじまりです。

(14)



どうくつのなかは かなりくらい。しかし ヘルメットのあかりが とてもあかるくてらします。「すばらしい！」とレオンはいいました。かべや てんじょうの いたるところに さけめがあります。「ところで コウモリは どこにいるの？」とイエレーナとソフィーアが どうじに たずねました。「もしかしたら わたしたち、すぐに それをみることができるわ」と そのじよせいは いいました。

ようじんぶかく こどもたちは さらに あるいていきました。「おや、そのうえで、なにかが うごいてる！」とバドゥーが さげびました。「それが コウモリよ」と どうくつあんないにんは せつめいしました。こどもたちは おどろきました。どのコウモリも てんじょうから まっさかさまに ぶらさがっています。「よかった、どうくつにとうひょうして」と ソフィーアはうれしそうに イエレーナに ささやきました。

3. 絵本『レオンとイエレーナ おおきなえんそく』への作者の思い

絵本『おおきなえんそく』は、コロナ禍2年目の2021年5月に刊行された。内容的には、これまでのシリーズ絵本の中で初めて感染症にかかった幼稚園児が登場している。そこにはコロナ禍における保育を目のあたりにしている作者たちの思いがあることが推察される。この点をも含めて、刊行の経緯について質問した。

「最新の絵本『おおきな えんそく』は間接的にコロナパンデミックをテーマ化しています。この絵本もまた実際のエピソードに基づいています。ある保育施設で子どもたちは玄関ホールの新設を計画していました。設計が完成する前に、多くの子どもたちはコロナのために保育施設に来ることが許されなくなりました。緊急保育で保育施設に来ることが許されている子どもたちは、玄関ホールの設計を自分たちだけで完成させたくなかつ

た。それで家庭にいないならならぬ子どもたちをどのように参加させることができるのかよく考えました。このエピソードを私たちは絵本『おおきな えんそく』に取り入れたのです。ただし、私たちはコロナを水疱瘡に置き換えました。なぜなら、2020年の秋の段階では、パンデミックが間もなく克服されると思っていたからです。他方では、コロナとは関わりなく、ここでも参画の基本的なテーマが取り上げられているからです。つまり誰が保育施設の共同体の構成員なのか？現在出席している子どもたちだけなのか？またはたとえどんな理由があるにせよ、一時的に保育施設に通うことのできない子どもたちもなのか？」

題名に形容詞「おおきな」(groß)をつけていることの理由については次のように説明した。

「このことについて私たちは書いている段階で全くあれこれ考えませんでした。タイトルはとにかくこうなったのです。だが形容詞『おおきな』によって、保育施設のグループ全員の遠足には大変な努力がいることを指摘しています。多くの場合、このような計画は子どもたちのために大人によって行われ、子どもたちはこの計画をただ『消費する』(konsumieren)だけです。しかし子どもたちが計画に参画すると、計画立案に結びついて、十分によく考えること、そして決定すること、自覚を持って、参画することすべてを体験することになります。だからそれは全くとても大きなもののなのです！」

クナウアーとハンゼンらが、感染症をコロナウイルスではなく、水疱瘡に置き換えたことに対しては様々な受け止め方があるだろう。しかし彼らが絵本を通して伝えたいこととは、「保育施設の構成員とは誰なのか」という点である。そういう意味では、メッセージは十分伝わっていると捉えられる。この問題は、コロナ禍を越えて、普遍的な価値を持っているのだから。また、子どもたちが遠足という行事を単なる受け身の消費者ではなく、自身が大きな努力をして決定することが重要であると、幼稚園の青グループの子どもたちはドラマチックに表現している。この点については、行事の数がドイツに比べて格段に多い日本の保育現場に対して、重要な示唆を与えている。

4. コロナ禍の保育における子どもたちの参画

最後に、クナウアーにドイツの保育施設の現状とともに、現在の自身の願いについて質問をした。

「民主主義とは、人々が確実に得られる権利に基づいています。コロナパンデミックにおいて、部分的にみられた権利の制限は十分に根拠づけられなければなりません。このことは世界的なコロナ措置（マスクの義務化、間隔をあける規則、ワクチンなど）の権限をめぐる激しい議論の中でも明らかになりました。子どもたちも参画する権利を持っていることは、国連子どもの権利条約第12条の中で保障されています。この権利を付与するか否かは、特定の有利な状況または不利な状況に左右されてはいけません。確かに保育施設でも特定の権利が制限されなければならない状況はあり得ます。その場合にはそのことを子どもたちにも十分に説明されねばならない。コロナパンデミックにおいて、子どもたちにとっても保育施設の日常は変化しました。ドイツでは、子どもたちは保育施設で固定コーホートの中だけで一緒に遊ぶことが許されていました。簡単に別のグループに変わることができませんでした。衛生措置が保育施設の日常の多くの面に決定的役割を果たしていました。そして多くの子どもたちは長時間にわたって保育施設に通うことが全くできませんでした。」

これまで筆者はドイツの保育施設でフィールドワークを行ってきた。コロナ禍以前、ドイツの保育施設、とりわけ子どもたちの参画に積極的な園では、クラスや担任の垣根を越えた、オープン保育が主流となっていた。そして、子どもたちは自分たちに関係する事柄については、共同決定することが保障されていた⁶。このドイツの参画的な実践が、コロナ禍の中、制限されたものになっていることは非常に大きな変化である。クナウアーは次のように続けている。

「特にパンデミックの当初に、多くの保育者は、参画は今やもう無理だという印象を持ちました。しかしそうではない。子どもたちはパンデミックの時代においても、保育施設で参画することができます（しなければならないのです）。確かに子どもたちにとっても、（大人と同様に）以前には可能であったいくつかの決定が制限されています。しかし保育者は子どもたちに対して、相変わらず多様な参画の機会を認めることができるのです。」

クナウアーの言葉は、絵本『おおきなえんそく』を通して、子どもたちの参画は、保育者の姿勢によって様々な場面で可能であることが理解できる。そして、何よりも求められているのは、保育者が子どもの権利を尊重する子ども観を持続

けることなのである。クナウアーは次のような言葉で締めくくった。

「民主主義的参画はあらゆる人にとっての基本的権利です。出自、性別、年齢にもかかわらず！まさにパンデミックにおいて明らかになっていることは、大人の利益に関しては十分に話題になるが、子どもや青少年の状況についてはわずかしき話題にのぼらないということです。子どもたちも自分の要望、利害、考えを提供することに対して、私たち大人は責任を負っています。民主主義は保育施設から始まるのです。」

クナウアーの「民主主義は保育施設から始まる」(Demokratie beginnt in der Kita)という言葉の意味することをどのように受け止め、コロナ禍の保育の中で、いかに実現することができるのかが問われている。それはコロナ禍後の保育のあり方にも影響を与えるであろう、保育観、子ども観への根本的な問いなのである。

おわりに

絵本『レオンとイエレーナ』は縦17cm、横17cmという小さな本だ。そして2014年にシリーズ第一冊目が刊行されて以来、3ユーロという価格を保持している。クナウアーによると、サイズと価格は出版社と作者の間で共同で決めた。クナウアーは次のように述べている。

「子どもたちが容易に持ち運びできて、あまり値段が高くはない小さな冊子にしたかった。同時に、小グループでも十分に読んで聞かせることのできる大きさであるべきでした。」

彼らの絵本づくりは常に子どもの視点で行われていることが、サイズや価格にもあらわれている。絵本『レオンとイエレーナ』はこれまで同じ年に複数の話が刊行されている。クナウアーによると、現在、すでに2冊の新しい絵本の契約を出版社と結んだという。どこからそのようなエネルギーが湧いてくるのか聞いたところ、絵本作りはハンゼンと出版社と共同で行っている。絵本づくりにそれほどクナウアー個人のエネルギーを必要としていない。絵本づくりは「とにかく楽しい」と返事が返ってきた。クナウアーとハンゼンは参画と教育研究所を立ち上げて、様々な立場の関係者たちと共同して仕事をしてきた。その一環として始まった絵本づくりもまた共同作業の中で行われている。そして参加者一人一人が幼稚園の青グループの子どもたちとともに参画を経験し、その中で学んでいることが、クナウアーへの質問で理解できた。そして何よりも出版に参加している構

成員たちが絵本づくりを楽しんでいる。そこには、彼らの民主主義と参画をポリシーとする生き方が反映されている。

絵本『レオンとイエレーナ』はドイツの実際の保育実践の中から生まれた。そのため保育施設の子どもや保育者にとって物語をイメージしやすく、直接実践に結びつけることができる。日本の保育者、親、そして何よりも子どもたちにとっても、子どもの権利について考えるために示唆を与えてくれる絵本である。今後の課題は、『レオンとイエレーナ』の絵本全体を分析し、その詳細な特徴を明らかにすることである。そして、日本の子どもたちや保育者に実際に絵本『レオンとイエレーナ』を通して、保育施設における子どもたちの参画について考える機会を提供することである。

謝辞 本研究では、キール専門大学教授のクナウアー氏、バルテルスマン財団のマインホルト・ヘンシェル氏にご協力をいただいた。ドイツ語用語法については福岡教育大学非常勤講師のロナルト・ライベルト氏に助言をいただいた。ここに感謝を表する。

付記 本研究はJSPS 科研費 19K02644 の助成を受けたものである。

註

¹ 船越美穂 (2020) : 「ドイツの保育施設における子ども達の参画(II)ーモデルプロジェクト (Die Kinderstube der Demokratie) を観点としてー」福岡教育大学紀要第 69 号第 4 分冊, 99 頁。

² 船越美穂 (2018) : 「ドイツにおける子ども達の参画を促す保育者研修の実際と参加者の意識が意

味するもの」福岡教育大学紀要第 67 号第 4 分冊, 113 頁。

³ Hansen, R. / Kanuer, R. (2021) : Leon und Jelena Der große Ausflug. Verlag Bertelsmann Stiftung. Gütersloh.

⁴ 前掲『ドイツの保育施設における子どもたちの参画(II)』99 頁。

⁵ ドイツ語で水疱瘡は Windpocken と言う。絵本の中で、ゼムラは風 (Wind) が病気を撒き散らしているとイメージしており、そのことを挿絵が表現している。物語の中でゼムラは間違って “Pockenwind” と言っている。従って日本語訳では「ほうそうのみず」とした。

⁶ ドイツの保育施設における子どもたちの参画について、筆者は以下の研究において明らかにした。

船越美穂 (2012) : 「幼児期における民主主義への教育(II)ー『バイエルン陶冶ー訓育計画』における『参加』(Partizipation) の思想と実践ー」福岡教育大学紀要第 61 号第 4 分冊, 77-88。

船越美穂 (2013) : 『幼児期における民主主義への教育(III) - Willy - Althof - Kindergarten における実践ー』福岡教育大学紀要第 62 号第 4 分冊, 95-107。

船越美穂 (2015) : 「幼児期における民主主義への教育(V)ーシュレースヴィヒ=ホルシュタイン州の保育施設における子ども達の参画ー」福岡教育大学紀要第 64 号第 4 分冊, 153-162。

船越美穂 (2016) : 「ドイツの保育施設における子ども達の参画ー多様性の教育を観点としてー」福岡教育大学紀要第 65 号第 4 分冊, 73-84。

船越美穂 (2020) : 「ドイツの保育施設における子ども達の参画(II)ーモデルプロジェクト (Die Kinderstube der Demokratie) を観点としてー」福岡教育大学紀要第 69 号第 4 分冊, 89-101。

